

【書評】 吉田忠監修・著、田尻祐一郎・佐藤晃洋著『帆足万里』

劉 宇昊

近世と近代を別々に見れば、時代によって学問や思想が大きく異なることは間違いない。しかし、近世と近代を全体に見れば、近世中・後期には学問の形而下の価値を追求する実務学者が現れた。彼らが東西の学問の長所を取ることを断固として主張するのは、近代学問とりわけ西洋科学の日本ひいては東アジア地域における定着のための先行条件を提供した。帆足万里はその中の一人である。

研究者にとって、帆足万里の名は珍しいものではなく、関連する研究の数も少ないとは言えない（関連研究は本書末尾の文献リストを参照）。本書では、先行研究と万里に関する様々な史料に基づいて、万里の生涯を本筋として、万里の事跡、学問、主張を全面的に紹介している。本書は歴史上の人物紹介の性質を持っていただけでなく、初心者に対して非常に友好的で、しかもかなりの思想的深さを兼ね備えており、研究者にとっても重要な史料価値と参考意義がある。本書は帆足万里を研究する者にとって、真つ先に読むべき必読書となると言える。

本書は全部で十章に分かれている。このうち、帆足万里の生涯を論じる第一章、第二章第一節、第三章、第五章、第八章、第十章（第二節（2）を除く）は佐藤晃洋氏が執筆した。万里の儒学や経世論などの思想内容を論じる第二章第三節、第六章、第七章は田尻祐一郎氏が執筆した。万里の医学・蘭学研究を論述する第二章第二節、第四章、第九章、第十章第二節（2）は吉田忠氏が執筆した。本書は吉田忠氏が監修した。

第一章では、万里が生まれた日出藩（現・大分県日出町）の歴史、地理、人文、政治などについて紹介する。万里の家系、師承（脇愚山の親伝弟子、三浦梅園の孫弟子、中井竹山・皆川淇園・亀井南冥らと交流）などの社会情報を確認した。この章は、万里をめぐる生活背景と人文社会背景から始まり、万里をより広い思想背景において考察するという考え方の明確な提示をしている。

第二章では、教育者としての万里の像が描かれている。本章では、万里の儒教教育方針（四書五経を主とし、他の

典籍も兼ねて学習する」と医学教育方針（漢蘭兼学）を明らかにして、万里が行った教化実績（『日出孝子伝』の編纂・孝子顕彰運動）、主要弟子の状況などを紹介した。経世論（『肄業余稿』から『東潜夫論』まで）では、本章は、万里の学問と江戸時代の学問とのつながりの角度から、万里が主張する朝幕関係、学問的態度、学派的見方などを紹介した。本章は、万里の生涯における最も重要な教育イメージについて基調的に説明する。

第三章では、政治参加者としての万里の像が描かれている。本章では、万里が日出藩家老に就任した後、人材登用、支出削減、綱紀粛正、賞罰の励行など一連の取り組みを通じて藩政改革を行ったことを述べる。しかし藩内の不和、改革の厳しき、万里の老衰などの理由で、万里は最終的に家老を辞し、教育分野に復帰した。本章は、万里の教育イメージ以外に万里の人生に大きな影響を与える政治イメージについて基調的に説明する。

第四章では、『窮理通』の成書の経緯を述べ、本書の内容と章節区分について紹介した。万里の『窮理通』は三段階（初稿↓『窮理小言』↓オランダ語学習）の下準備を経て最終的に形成された。本章では、『窮理通』が論じた天地形態、力、電磁原理、光学知識、大気成分、気象などの内容を詳細に紹介し、高い評価を与えた。本章は万里の生

涯が注目している重点分野の蘭学研究及び成果について詳しく述べたものである。

第五章では、万里が家老を辞した後の生活について述べる。万里辞任後の西庵精舎の移住、『井楼纂聞』『巖屋完節志』という伝記書の出版などについて述べた。本章は万里の生涯における政治生活と晩年の学術発展との間の過渡的な位置にある。

第六章では、万里の儒学と和学の成果と基本的な主張を紹介した。儒学の分野では、万里の『四書標注』は朱熹とは異なる理解を示しており、かえって多くの学派の長所を集めて、中井履軒、大田錦城などの考証学の観点に参照をしている。和学の分野では、万里の『帆足先生神代説』は歴史主義の視点から上古世界を解釈し、神秘主義に反対する姿を示している。本章で明らかにしたのは、万里の学問の注目は完全に実務的な現実世界にあるということである。

第七章では、万里の経世論『東潜夫論』の主な内容を紹介する。『東潜夫論』では、万里は既存の朝幕体制を支持し、朝廷が「文事」（「文事」に対する「武事」の機能は幕府が担う）の機能を担って学校を興すこと、蝦夷開発、田土売買の許可などを主張している。そしてアヘン戦争の衝撃に基づいて、時局、東アジア諸国・ロシア・英国などへ

の様々な認識を述べた。本章は、万里経世論の主張を紹介した上で、万里の学問は江戸儒学思想史における位置を論述し、万里の学問は公共秩序を守る人倫の学であることを指摘した。その上で、万里の学問は徂徠学とは異なるが、中井竹山などの懷徳堂儒者と共感（万里の師脇愚山は懷徳堂に学んだことがある）の特質を持っていることを明らかにした。本章の内容は、万里の学問における儒学の主体的地位を明確にするための明らかな役割を果たす。

第八章では、弘化四年（一八四七年）、七十歳の万里が突然妻と弟子数人を連れて京都を訪れた経緯を述べる。本章では、万里の上京後の生活（採薪亭在住）、上京の原因（藩政への不満の一方で、朝廷を説得して学校を建設しようとした）、在京中の交際（本草学者山本亡羊との交流）などを記す。万里は京都に一年しか住んでいないが、京都を往復した疲れで老いた体が元に戻りにくくなり、万里の逝去の遠因となった。

第九章では、万里の医学思想を紹介する。前述したように、万里の医学方針は「漢蘭兼学」であるため、万里は漢方医学に精通している（『傷寒論新注』）と同時に、蘭医の最新成果（例えば、牛痘接種など）を受け入れている。本章は万里の医学成果を紹介した上で、万里の医学観念に触れ、万里のより深いレベルの思想認識の紹介である。

第十章では、万里の生涯の最後の段階（養子吉田民次郎の養子縁組、新たに入門した門人など）や逝去後の顕彰活動などを紹介する。本章は万里の七十四年余りの人生の最後のまとめである。

以上が本書の大まかな内容のまとめである。本書を読んだと感じたのは、本書の書き方がしっかりしていて、引用されている史料が詳しい点である。著者らが長い間この分野に没頭して江戸時代の古典文献に精通していなければ、このような奥深いわかりやすい著作はあり得ない。評者の観察によると、本書は以前の帆足万里の研究書や伝記書に比べて、次のような特徴がある。

第一に、本書は三人の共著であるが、本書が渾然一体であり、本筋がはっきりしており、著者らの考え方が明らかになっている。そのため、それぞれの著述の内容が孤立し、連絡が不足している問題は全く存在しない。本書は万里の生涯を手がかりにして、万里の異なる分野での学術への主張を間に挟み込むことで、読者に突飛な感じを与えることができないだけでなく、著者の章の設置の合理性に賛同することができる。例えば、万里の晩年に著された『医学啓蒙』は、万里の中年期から訳された西洋医学書よりも万里の個人の医学思想を体現しているため、万里の医学論は第九章に置かれて論説されている。このような処理は、中間部分

で思想内容を集中的に論説し、万里の一生を手がかりとする本書の本筋を薄めることを回避し、万里の思想の生成期間にも合致する。本書は全体性を重視した上で、三人の著者はそれぞれの叙事スタイルを残している。佐藤晃洋氏は時々、万里の漢詩や同時代の漢詩を引用して当時の雰囲気や心境をかき立て、文章の可読性を高めるのに良い効果を持っている。田尻祐一郎氏は万里の学説と他の学派学問との対照を重視し、読者に万里の思想が江戸時代に置かれた位置をより明確にさせた。吉田忠氏は万里の学問、特に蘭学学問の源流に対する考証を重視し、その考証の精緻さ、引用の広さはその深い学術的能力を示している。三人の著者の文風は互いに協力し合い、補い合い、共に力作を作ったと言える。

第二に、本書は帆足万里の生涯と思想の紹介書であるが、本書の内容は帆足万里一人に限らず、日出藩を時代から独立した学問の孤島として描くのではなく、万里と同時代の学者・学問との関連を重視し、もっと広い視点で万里の思想を観察する。横方向では、本書は万里の思想と同時代のそれと直結している脇愚山・広瀬淡窓・中井竹山ら、さらには直接連絡がなくても影響が大きい伊藤仁斎・荻生徂徠らの学説を関連して論説し、以上の学者・学派の主張と万里の思想との共通点と差異点を指摘し、多様な角度からよ

りはつきりした万里の思想像を形作った。縦方向では、本書は万里の思想における二つの主要な内容としての儒学と蘭学に影響を与えた朱子学の世界観と蘭学科学書を確認する。さらに、万里本人もはつきりと認識していないかもしれない江戸時代の伝統的な学問の世界観から近代的な性格を持つ西洋科学の考え方への変遷を深く示した。

第三に、本書は万里の人生のタイムラインを叙事の順序とし、万里の生涯を視点として、多くの生き生きとした万里の生活の場面を描き、読者に親しみやすく臨場感を与えた。本書は万里の評伝であるが、「評」ではなく「伝」を重視している。つまり、著者は百年後の現代の学者としての立場から、万里の人物像と学術思想を遡及的に評価するのではなく、万里の経歴を繊細に再現し、万里の交際、生活、読書などの現実的な場面を深く描いた。これにより、読者はその場に臨み、まるで万里のそばに立ってもう一度万里の生活を経験したかのようなになった。それと同時に、万里の生涯という本筋に基づくために、本書は万里の思想内容を解説する際に、ある視点やモデルで要約しようとしなかった。特に万里の造詣が最も深い西洋科学は、絶えず「近代化」している学科であり、それを観察する「近代化」の視点はある程度避けられない。しかし、本書は、万里が到達したことがない「近代」の視点で万里の科学的成果を評

価するのではなく、万里の時代に立って体験した蘭学をさかのぼる。これは明らかに万里の生涯という本の本筋をしつかりと果たす意義がある。本書の記述は質朴かつ、精密であり、叙述スタイルが緩やかであると同時に、著者の非常に深い考えが込められていると言える。

本書全体を見渡せば、著者たちが意図した論述の重点は、万里が儒学、経世論、蘭学などの各分野で得た膨大な成果である。万里が読んだ文章や著書から見ると、万里のこれらの分野に対する関心の広さ、総括の詳細さは同時代にはほとんど右に出る者がいないだけでなく、江戸時代全体でも追い越す者は少ないだろう。本書は、万里の各分野における基本的な主張、主張の背後に隠された思考パターン、ひいてはこのような思考パターンを形成した歴史的根源を詳細に考察した。本書は大分県先哲叢書の一部として地域文化の顕彰の価値を持ち、そして読者に時代とは異なる生き生きとした江戸後期の思想者像を示した。

読者にとって、本書を読解した上での難点は、万里がなぜこのような広い多くの分野に関心を持っているのか、多くの科学的成果を上げることが支えている、より深い思想の根源がどのようなものであるのかにある。このような問題は伝記書としての本書の議論の範疇を超えているが、評者個人の関心として、ここで簡単に検討したい。儒学、

和学と蘭学間の巨大な溝と谷はともかく、万里が書いた蘭学著作『窮理通』内部の章節の間でも、今日の細分化された学科という視点から見ると、電磁気学、力学、光学など明らかに大きな違いがある。江戸後期には蘭学が盛んになったが、当時の一般人が生涯のうちにか二科目に精通することはすでに容易ではない。万里は四十代になってオランダ語を学び始めたばかりの状況で、ヨーロッパの十六、十七世紀の最新の研究成果を詳細にまとめることができただけ、その原因は確かに深く考える価値がある。『窮理通』の冒頭で、万里は「夫人之始生、与鹿豕群、猿狖之与居、然以其有神明之智、有先觉者出、立厚生利用之道、設孝悌彝伦之教、郁郁乎其盛矣」（『窮理通』自序）と書いた。いわゆる「孝悌彝伦之教」は儒教の倫理教化を指す。万里が重視する「厚生利用」は『尚書』に由来するが、西洋科学が近世において初步的に展開された後、伝統的な学問よりも「厚生利用」の特質に合致していることは明らかである。それゆえ、「当今之務、宜明小物而登之用、是窮理之学所以興也」（『窮理通』自序）。ここで万里という「小物」とは、倫理という「大物」と対向する自然なものを指す。さて、これは万里が儒学を学問主体としているにもかかわらず、万里が儒学自身の主張を利用して学問の内容を広げていることを意味している。

万里は儒学を学問の主体と見なし、その『窮理通』の書名における「窮理」もその学問と儒学の根源を見ることが出来る。しかし、東洋の「窮理」は西洋の「窮理」ではない。近代啓蒙思想家である福沢諭吉は、「彼れ（漢学）は多言にして実証に乏しく、これ（洋学）は有形の数を示して空を云うことは少ない」（『福翁百話』三十四）と率直に言った。福沢諭吉が漢学が陰陽五行などの「空理」の上に築かれたと考えているのはおおむね間違いないと言える。しかし、面白いことに、江戸時代の一部の儒者が儒学の名を冠しているが、考えの内実はすでにひっそりと変化していた。山海などの地形形成を論述する際、万里は「西人之学、実測雖精、窮理未至」（『窮理通』卷之三）と述べた。ここで万里が言った「窮理」は明らかに儒学の「空理」ではなく、山海がなぜ形成されたのかという「実理」である。『窮理通』が引用した一部の蘭学書籍は十六世紀に本になっており、最新の科学成果ではなくなった。万里の欧州の学説に対する「窮理」を重んじないという批判は、万里が漢学の立場から洋学への批判ではなく、先端の地質学の立場に立って後れた地質学を批判していることを示している。万里の儒教における「窮理」という言葉への踏襲は、このような立場の転換が実際には万里本人でもよく知らないかもしれないことを示している。では、万里のこのような思

考パターンはどのようなにして生まれたのであろうか。このような思考パターンは儒学と洋学の研究にどのような具体的影響を与えているのだろうか。これらの問題は今後の帆足万里の思想研究の課題とすべきであると思う。

最後に、やはり本書評価のテーマに戻ろう。本書の監修吉田忠氏はあとがきで、「本書が万里の生涯・思想にいくらかなりとも新たな光をあてることができたら、著者一同にとつてこのうえない喜びである」と謙虚に記している。本書全体を見渡すと、本書の出版に伴い、吉田忠氏の期待がすでに実現したと断言できる。

※吉田忠（監修・著）、田尻祐一郎・佐藤晃洋（著）『帆足万里』、大分県先哲叢書、大分県教育委員会、二〇二三年三月

（中国 東北師範大学）